

レスリングの底辺拡大と普及について

Popularization of amateur WRESTLING

1K03A190-5 藤元慎平

指導教員 主査 中村好男 先生 副査 太田章 先生

【緒言】

子どもの体力低下が大きな社会問題となっている。文部科学省が昭和 39 年から行っている「体力・運動能力調査」によると、子どもの体力・運動能力は、調査開始以降昭和 50 年ごろにかけては、向上傾向が顕著であるが、昭和 50 年ごろから昭和 60 年ごろまでは停滞傾向にあり、昭和 60 年ごろから現在まで 15 年以上にわたり低下傾向が続いている。これらの背景を捉え、小さい頃からスポーツに取り組むことの大切さが重要視されてきている。

また、つい先日テレビで K-1 の試合が報道されていたが、選手のバックホーンを見てみると、レスリングをしていた選手が多い。大晦日に行われるプライドの試合も、紅白歌合戦を超える視聴率を出す瞬間があり、格闘人気は凄まじい。

しかし「子どもの運動の大切さ」、「格闘ブーム」という追い風を利用しきれていない現状がレスリング界にはある。16 年間のレスリング人生の集大成として、底辺拡大と普及における問題点と解決法を探る。

【第一章】競技としてのレスリング

レスリングとは人類が始めた最古のスポーツである。力くらべが娯楽だった時代に、色々な技術が考案され、やがてレスリングが生まれたという歴史がある。それ故、人間が住むところには、地域特有のレスリングが存在している。

日本においては、早稲田大学柔道部の八田一朗氏が昭和 6 年に「大日本アマチュアレスリング協会」を設立し、産声を上げる。以後、日本のお家芸として、オリンピックでは驚異的なメダル数を誇るが、現在は衰退の一途を辿っている。

【第二章】調査実施

レスリングの普及という点から、底辺拡大は欠かせない。よって著者がお世話になったレスリングクラブのちびっこレスラー（小学 1 年～中学 3 年まで）と、その両親どちらかに対しても調査を行った。

今回の調査から、ジュニア選手は有名レスラーなど高い目標を掲げていることがわかる。しかし練習がきついため辞めたいと感じることもあるようで、矛盾した気持ちを抱いている。また、レスリングが個人スポーツであるという点も、子どもにとっては辛いことのようなのである。また試合で負けた際の両親からの叱咤に、大きなストレスを受けて

いることから、レスリングに対しての意識に大きな差があると考えられる。

両親の意見を聞いてみると、子どもがレスリングを始める前はネガティブなイメージを抱いているが、いざ始めてみると全ての方々が素晴らしいスポーツだと感じ、それが時に子どもがストレスを感じるほどの熱の入れようとなって表れている。

今回の調査で明らかになった問題点は、「レスリングに対する意識」である。今後この問題点を解決していくためには、指導者が練習内容を工夫し、両親はただ叱るというだけでなく、精神的なフォローをしていくことが、レスリング離れの歯止めをかけると考えられる。

【第三章】現在のレスリングの現状と問題点

日本のレスリング界は、かつての栄光からは想像できないほど衰退している。そのためジュニア育成に成功しているレスリング強豪国と、日本の成功例・または期待値の高いものを抜粋して調査した。

全てにおいて言えることは、「地域と一体となった環境」と、「常に世界を意識した政策」を実施していることである。今後のレスリング王国の復活のためには、この二つを中心にジュニア育成を進めていくことが必要となる。

【第四章】結論

今回の調査で、レスリングの普及・拡大を妨げるものは、「親子間のレスリングに対する意識の差」と「日本の実力不足」であると考えられる。

小さい頃から勝負にこだわりすぎず、体力づくり程度の軽いスタンスで取り組むことが大切である反面、常に世界を意識した強化策も必要だという矛盾があるのが現状である。この矛盾は、世界各国のジュニア選手強化の例を参考にしたり、精神面などについても深い知識のあるコーチ陣を配備することが、矛盾を無くし、普及拡大の一步になる。

【第五章】謝辞

今回の卒論作成にあたって、中村好男教授、牧伯先輩、ゼミのみなさん、またレスリングクラブの選手・保護者には大変お世話になった。この場を借りてお礼を述べると共に、日本のレスリング界のためにこの論文を少しでも活かしたいと思う。